



TITLE:

公開シンポジウム「日中教育課程 改革の動向」 2007年度: 開会の挨拶

AUTHOR(S):

CITATION:

公開シンポジウム「日中教育課程改革の動向」 2007年度: 開会の挨拶.
子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報
告書(2007-2011年度): 173-174

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179674>

RIGHT:

開会の挨拶

司会：田中 耕治（京都大学）

中国の中央教育科学研究所と京都大学大学院教育学研究科の中に設けられております教育実践コラボレーション・センターと日中教育共同研究センターの共催であります、公開シンポジウムを始めさせていただきます。テーマは、日中教育課程改革の動向ということで、今日本では今学習指導要領の改訂が迫っている状況です。中国でも課程標準の改訂が進んでいると聞いております。それぞれの国の教育課程の動向の交流により、それぞれの国に示唆が得られればと考えております。本日司会をいたしますのは、京都大学教育学研究科の田中と申します。それでは開会のご挨拶をしていただきたいと思います。まずは京都大学教育学研究科の矢野先生お願いします。

矢野 智司（京都大学）

みなさん、こんにちは。京都大学大学院教育学研究科副研究科長の矢野です。研究科長が会議中なので、代わりに歓迎のあいさつをさせていただきます。国際比較のテストで日本が何位になったかが新聞をにぎわすことがありますけど、学力の国際比較が可能になるのは、宗教や文化などを超えて、各国の教育に共通するものがあるということです。ということは、各国の教育改革の成果や課題を交流し合うことは、大変重要な機会になると思います。今研究科はここ数年このことを意識しており、今年は北京師範大学から先生のみならず学生もお招きし、京都大学の研究者や院生との交流ができました。今回は、中国で先進的な研究をなさっている中央教育科学研究所の先生をお招きして、それぞれの国の成果や経験、課題点を交流したいと思います。この交流がお互いの子どもたちの学力を高めることに役立ち、お互いの国の子どもがより幸福になるために役立ったらこんなにうれしいことはないと思います。

田 輝（中央教育科学研究所）

みなさん、こんにちは。中央教育科学研究所の田輝と申します。田中先生、矢野先生、そしてご来賓の京都府教育委員会の方々、並びにご在席のみなさまに、私たち6名が、中央教育科学研究所と京都大学大学院教育学研究科の合同研究の仲間として、このような研究活動、そして今日の「日中教育課程改革の動向」という国際シンポジウムに参加できて、とてもうれしく、光栄に感じております。さて、この場をお借りして、このような素晴らしいチャンスを与えてくださいました、京都大学教育学研究科並びに田中研究室のみなさまに心からお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。さて、今回の交流を成功できますように、東北師範大学の若手教員であって中国では数学教育の専門家として中央教育科学研究所の特別研究員である孔凡哲先生と一緒に来ていただきま

して、明日の午後、中国の小学校数学の教育活動、特に分数の教え方についてのご発表を行われますので、みなさまご期待ください。わが中央教育科学研究所と京都大学教育学研究科の学術交流は数年前からあり、そして2年前のうちの朱先生の京都大学訪問をきっかけに、交流はさらに緊密なものになりまして、日中教育共同研究センターの設立が提案されました。その後、田中先生や日本の立派なコーディネーターの方々のお仕事のおかげで、交流を深めるため、12月に川崎研究科長を北京にお迎えし、交流の機会をもてました。そして、今年1月28日という、中央教育科学研究所創立50周年という記念すべき日に正式に交流の協定が結ばれました。そしてさっそく共同研究が始まりました。今中国では、小中学校の学力評価についての研究と新しい課程基準の問題検討という二つの研究課題に取り組んでおりまして、これらの課題について、田中先生や西岡先生の研究チームからたくさんのご協力をご指示をいただいています。そして田中先生の方でも、今年は文部科学省の科学研究費で研究をなさっているようです。日中の交流は以前からあるものでありまして、今日は日中間の交流を確実なものにし、両国に共に存在している多大な課題の解決の糸口を見つけたいと思います。共同研究センターは2008年度には新しい課題にチャレンジしたいと考えておりますので、諸先生方の研究に協力できることがあれば、ぜひ協力させていただきますので、日中教育共同研究センターをどうぞご利用くださいますようお願いいたします。これで私の挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

文責：細尾 萌子（京都大学大学院）